法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-14

〈書評〉D.F.フレミング『現代国際政治史』

オバタ, ミサオ / OBATA, Misao / 小幡, 操

(出版者 / Publisher) 法政大学社会学部学会 (雑誌名 / Journal or Publication Title) Society and labour / 社會勞働研究 (巻 / Volume) 12 (号 / Number) 3 (開始ページ / Start Page) 127 (終了ページ / End Page) 138 (発行年 / Year) 1966-02-28

香評

D. F. Fleming

The Cold War and its Origins 1917—1960

George Allen and Unwin Ltd. London

幡操

小

り多い。読者のゆるしを乞わねばならない。

いま評という妙なものになる可能性がかない。しかし飜訳者の願いは、もつぱら原著の内容をない。しかし飜訳者の願いは、もつぱら原著の内容をない。しかし飜訳者の願いは、もつぱら原著の内容をない。しかし飜訳者の願いは、もつぱら原著の内容をがある。

いるで表して内容の紹介で終るかもしれない。

1

いは現代に深く根をおろした悪である。この事実は、て、これを正しく理解することはできない。冷たい戦国際関係から現代をみるとき、冷たい戦 いを 除 い

評

ある。
かりとらえねばならない。これを試みたのが、本書でかりとらえねばならない。これを試みたのが、本書でるためには、冷たい戦いの起原と現状と発展とをしつ別個に存在する。だから、現代の危機的側面を理解すめる。

命」前にまでさかのぼる。
さらにロシアにおける「十月革命」さらには「二月革冷たい戦いの起原を探ぐるために、第一次大戦まで、て、第二次世界大戦以後としている。ただし著者は、がある。 しかし本書でも、ほゞ一般の慣習に な らっがある。 しかし本書でも、ほゞ一般の慣習に な らっに現代」をいつのころときめるかについては、異論

大の関心であったのだあろう。と緊急な課題があり、具体的にこれと取組むことが最は、いかにして冷たい戦いを終らせるかという、もっ必ずしも明確な概念規定をしていない。著者にとつて一つぎに、「冷たい戦い」の定義については、 著書は

し、それにだけは答えておかねばならない。れの意味で著書が使っているかという疑問 もあろうにはまつたく違つた二つの用法があるため、そのいずただ、読者としては、「冷たい戦い」ということば

「冷たい戦い」という表現をだれが最初に使ったか

だけのあらゆる戦い」を意味するものと考えている。 壊させ、または共産主義の実現をはばみ、少なくとえ 社会主義諸国では、冷たい戦いを、社会主義体制を崩 経済・政治体制を異にした国家間の「武力に訴えない のことばを一躍有名にして以来、多くの人々は思想・ という詮索は、いまはしない。 三月十二日のトルーマン宣言このかた、アメリカが実 ている。事実、資本主義国家群でも、この見方を裏づ に近いねらいがあったことを、時の国務省政策企画局 施してきた「ソ連封じこめ」政策にも、核心に、 けるような主張が強くおこなわれている。一九四七年 もこれを遅らせようとする資本主義諸国の政策だと考 つまり、「状態」説である。 だがソ連をはじめとする である。 う希望的観測の形でこれに似た考えがひそんでい 閣僚の歓迎の宴で、ケネディ大統領がおこなった 十二月三日、日米貿易経済合同委員会出席の日本側六 アフェアズ』誌で明らかにしていた。また一九六二年 一封じこめ」 ョージ・ケナンは、 同年七月号 の 『フォリン・ アメリカの評論家ウォルター いいかえると、「政策」説である。 演説にも、「中国政府の政策転換」とい しかし一般には、一 ・リップマンがこ これ 九 炟

> とみるかについては、 い。しかし「政策を含めての状態」と考えているよう に思われる。 著者は、 冷たい戦いを「状態」とみるか、「政策」 特にこれを明らかにしていな

2

る。 いる。全巻は索引まで入れると一一五八ページにのぼ やしたといっている。本書は二巻・四部に構成されて ともあれ、 著者は本書のために十五年の労力をつい

緊密な協力関係 場合、「大連合国」内ではアメリカとソヴエト ばならなかつたかを説く。このことは、第二次大戦 に、第二次大戦後なぜ冷たい戦いがするどく戦われね かつて戦い合ったことのないアメリカとロシアを中心 方」一九一七――一九四五年と題して、歴史上いまだ なにを「敵」とし、なにを「味方」とするかに、大き リカは、とらわれることなく歴史の現実をみるとき、 えあった事実を考えると、たしかに問題になる。 な混乱があったというのが、 第一巻は、序文その他のほかに、第一部 ーというより、 著者の題意であろう。こ 相互依存の関係にさ 敵 が最も کے アメ 赇

ごっっ。つった意味で、第一部はいわば「冷たい戦いの前史

義者 内部に起った内戦とこれに対する西側 たのは、一九一七年から一九二一年にわ 影響をあたえた この「前 ラィ 著者も同じ見解をとってい IJ '' 史 があ もの \emptyset りうる。 な 工 は何かについては、 か ル で、 Π しか 将来 べ 1 し、イギリ 0 カ . る。 冷] が 特に 諸 V たってロ 戦い 人によってさ E え の 強 0) に最 介入であ 調 平 して ・シア 0

五年 反共トル 冷たい戦いの始動とみるのが普通である。 も少しふれ 優位 むしろ一 連が開 異論 メ の地 1 には対ソ協調 IJ 九 は マンの大統領就任という事実も大いにあ た一九四七年の カ をも 九四 位を築きあげ 発するまでに核兵 しかし原爆の成功とその独 0) 五〇年を取扱っている。 彐 冷 つ人は少なく 1 たい 五年八月の広島に対する原爆投下か p ッパにおける冷たい ·戦い 派 \emptyset が } ようとするア F な はじまったとする。 ルーマン宣言をもって、 器の分野 い。 一 ーズヴェ 般に この期間 メリ 戦い」一九 であくまで ル しかし著書 は、 的 トの死 カ 保 さきに につい 有の 絶 1 四

根本原因だと、著者は考えるのだ。ない願いが、米ソの協力を、米ソの対立に転換させ

ことは 設けて説いている。 ジアについては、第二次大戦の終結からインドシナ戦 が、 であろう。 第二部に入れているのも、 ヴでひらかれた戦後の第一次四大国首脳会談を、 共産上義、 の休戦にいたる間における東南アジアの植民地主義 年から一九五○年までの情勢を記録 第三 部 九四九年における中華人民共和国の いうまでもない。著者もこの 一九五五年を取上げている。 は ナショナリズム 東アジアにおける冷た また、 著書独 の交錯関係 九五五年七月にジュ 特の見方を示すも ここで最大の ため している。 を、 戦 特に一章を 成立である 九二七 九 この 間 兀 題 五

して、 じって、 五. 年の四 第四部は「第二次冷たい戦い」 カにある以 この部(|大国首 著書はこれを「第二次冷戦」と称し、 戦 るのである。 いに敗 の最後にあたって、い 脳会談以後の情勢をえがいてい 7 れ メ たの IJ この カ が冷た か 場合、 の問 、ま一度 戦 題を考えて、 側の中心がアメ 第二次大戦にも 西 側 · る。 九 は な 五.

音評

ることはいうまでもない。いう認識と、なぜ敗れたのかというきびしい反省があ

3

学のアラムナスで、前者からは一九四九年に名誉学位 れに先立つ五年間モンマス大学の社会科学の教授もし で同校の政治学部長をつとめたことがある。 い学究生活だ。この間、一九四〇年から一九五一年ま ナッシヴィルのヴァンダービルト大学の国 をうけ、 ていた。 中は、リサーチ・プロフエツサーの地位にあった。こ の教授である。一九二八年以来というから、 三月二十五日、 アイ・ベイタ・カッパのメンバーでもある。一九三二 ング・スカラー シシルヴェニア大学でペイフィールド・トラヴエンリ 著者デンナ・フランク・フレミングは、一八九 1 四九年には、プリンストンの高等学術研究所 でもあっ イースタン・イリノイ州立大学とイリノイ大 後者からは学位を三つあたえられている。 一九三八――三九年の両度にわたってペ パリに生れた。アメリカ、テネシ をしていたし、 ケンブリッジ大学でフルブライト 一九四六年と一九四八 際関係 本書執筆 かなり長 専攻 1州 三年 0)

それよりも、一九三九年から八年間にわたって、著の煩にたえないし、読者も退屈するであろう。ョナル・スタディズの講師でもあった。その他いろいョナル・スタディズの講師でもあった。その他いろい基金派遣の講師をしたこともあるし、一九五九──六

り、 者がナッシヴィルのラジオで時事問題の解 説 を し 議をするどい観察眼でとらえていた。一九三八年 ウィークリで、それぞれ一欄をうけもって評論の筆を ン紙で、一九五二――六〇年にはメソディ る。 じっとこれをみつめていた。かなり幅の広い活 な流会も、 したし、 る国際連盟の危機や、軍縮会議の実状をつぶさに観察 かも、著者はまた、新聞記者として、 とっていた事実の方が、本書の理解の参考になる。 スメイトで、一九五五-として、ジュネーヴで満洲事変とエチオピア問題によ ュンヘン危機や一九六○年の四大国首脳会談の そしてこれが、 一九三四 ニューヨークの国際連合でもイラン危機 当時のニュースセンターだっ ――三七年にはナッシヴィ 本書を単なる歴史書とちがう生 ―六○年にはブリティッシ・ 他面、 ル・テネシア たロンドンで スト・ 歷史学者 つみじめ 動であ クラ っのミ の討

としたものとしている。

著者はまた第一次世界大戦にも参戦した。国際関係というないという大学生時代の「初心」の発露だとすれば、これに徹した人だということができる。アメリカの学者のなかには、手がかかつても民衆ともに考え、少しずつでも民衆の考え方で事態を動かしてゆこえ、少しずつでも民衆の考え方で事態を動かしてゆこれが、フレミングはこの点、ちがうようだ。あくまで学が、フレミングはこの点、ちがうようだ。あくまで学が、フレミングはこの点、ちがうようだ。あくまで学来の考えを実現してみたいという学者が少なくないまか。サールは、手がかかつても民衆ともに考え、少しずつでなく、手っとり早く政権と結びついて年来の考えを実現してみたいという学者が少なくない。国際関係著者はまた第一次世界大戦にも参戦した。国際関係者はいき、

味をもつことになつたのは、本書において著者がとっけら非軍事的な方法に頼るならば、共産主義との競の人だと評することができよう。だが、本書が一読のか人だと評することができよう。だが、本書が一読のか人だと評することができよう。だが、本書が一読のがという。この点、いかにもアメリカ人らしいアメリカがもがといって、フレミングはマルクス・レーニン主義者といって、フレミングはマルクス・レーニン主義者

の反省派を代表している。 著者は現代アメリカけた一面であって、この点でも、著者は現代アメリカってのけた。これは、いまのアメリカ人にいささか欠ことである。著者はこれをなんの遠慮もなく勇敢にやことである。著者はこれをなんの遠慮もなく勇敢にやことである。著者はこれをなんの遠慮もなく勇敢にやことである。 されは、いまの「メリカ人にいささか欠ことである。 されは、いまの点でも、著者は現代アメリカけた一面であって、この点でも、著者は現代アメリカけた一面であって、この点でも、著者は現代アメリカけた一面であって、この点でも、著者は現代アメリカにをいる。

5

大勝したはずのジョンソン大統領は、翌一九六五年二大勝したはずのジョンソン大統領は、翌一九六五年二のは、最右翼の候補者ゴールドウォーターが 当選 しのは、最右翼の候補者ゴールドウォーターが 当選 しー九六四年秋の大統領選挙で共和党が大敗を喫した

月七日になって、 救う唯一の道は、どれほど長くかかろうと、アメリ 解放民族戦線の果敢な攻撃以来、 たという。 の選ぶままに北ヴェトナムを爆撃することにあるとし 世論に対する侮辱」である。 域を覆うのである。 めの平和) という。 ことアメリカ国民も、 大統領がとった措置とあわせ考えると、 が、その後四月二十四日、ドミニカ問題でジョンソン を客観的に観察する人々のもつ常識的な見解 論」に転換した事実を指すのであろう、これは、事態 ム政策 がサイゴン政権の線にそうて事実上の 「北 進 ェトナムのアメリカ軍基地プレークへの南ヴェ てるような場合がもしくれば、 ナ リカの平和 ٢ そして、 ムの内戦に対する「侵略者」だと独 連邦のミサイルで保護をうけてい つまり、 著者の言おうとするのは、二月七日、 に乗りだしたのであり、その地域は、 崩壊の危機に瀕していたサイゴン政権 突如として、 実はアメリカによる、アメリカのた アメリカは「Pax Americana」(ア こうした考え方は、 はなはだ重大な情勢に直面 しかし、 北ヴェト そのときはアメリ アメリカのヴェト この考え方を捨 な 世界は無論 ナムが 明かに「世界 断したのであ い 世界の全地 である トナム 南 ソヴ した カは ナ 力 を -0

> みるのである。 あらゆる兵器をもって武装した「要塞アメリ かにとじこもってしまうことになるだろう、と著者は カ 0) な

ドイ 拠があるとした場合、 は余りにも無軌道で、またわがまま勝手にすぎ、 ものではない。 明かになったのち、ソヴェト連 弱かったのはいうまでもない。 ては、参加諸国の偏見から、 しなかった。一方、 た。しかしアメリカ自身は国 ルソンは集団安全保障機構としての国際連盟を提唱 としての責任を感じないものだといってよい。 ぐ侵略行為と国際連盟脱退によっ ときすでに遅かった。 った。二大国の参加のない国際連盟の基盤がはなはだ 第一次大戦後、アメリ こうした見方も、アメリカ内部では決して珍らし ツ、ファッ しかしこのような見方になんらかの シォ・イタリアの 国際連盟は、 世界におけるアメリ 日本、 カの大統領ウッドロウ・ 当初は参加 F 内の政争からこれに参加 軍国主義日本、ナチス・ 邦の 1 ソヴェト連邦に対し て、 動きが ッ 参加を求めても、 1 連 だれの目にも をゆるさな タリアの カ 0) 死 命 大国 相つ ゥ は き 1 制

え方は、

孤立主義であった。

されたのである。

アメリカの連

盟不

参加

の根本

失 IJ である。そして「アメリカの平和」に失敗すれば、「ア れもこれもみな「アメリカの平和」のためだというの ヴェトナムの実状は、明らかに戦争である。が、アメ は、 り、「極東の平和」を守るのだといっている。 みずから任じている。日米安全保障条約の場合ごとき たアジア地域にまで出てきて、 メリカの要塞」のなかにとじこもって生きてゆけばよ カは、 というのである。 そのアメリカが、第二次大戦後は地球の半周も離れ 反倫理の政策をあえて強行している。しかも、 国際連合の役割を奪ってまで「私設保安官」とな 戦争によって平和を守るという反論理、非現 世界の警察官をもって 無論、

だという。

「苦者フレミングが最も力を注いで批判しようとして
というのは、こうした「なりゆきまかせ」的な政策を、
いるのは、こうした「なりゆきまかせ」的な政策を、
いるのは、こうした「なりゆきまかせ」的な政策を、

きはどのようなものであろうか。それにしても、ソヴェト連邦の基本的態度とその動

関心となることはいうまでもない。アメリカとしてはソヴェト連邦の態度と動きが最大のとすれば、米ソ関係が問題の中心となり、したがってを間の「武力に訴えないだけのあらゆる戦い」であるかたい戦いが、思想・経済・政治体制を異にした国

れであり、深い憎しみでさえある。がかりは、著者によると、戦争に対するぬきがたい恐いガェト・ロシアの動きを知る最も重要な第二の手

5

書評

貧困 のが「平和 からすれば最も不毛の地であるロシアにソヴェ いとの見解をとっている。 れはイデオロギーそのもののもつ力によるものではな を成立させたのだとみる。というよりも、 文盲に近い人民大衆に支持させたのであって、そ が他の諸原因 時 代の とパン」をスロ 圧 制とたえざる戦争による人民 と相まって、元米マルクス主義 1 ガンとするソヴェ 戦争そのも 0 ト体制 卜 秱 革命 理論 度 0)

側連合諸国 層深刻なものとし、 をとった。 ら一九二一年にいたる反革命による内戦と、 そして、戦争に対するこの憎しみは、一九一七年か 一つは、 「が使嗾し援助したことによって、二つの形 これが第二次大戦につながってゆ 戦争そのものに対する憎悪感を一 それを西

失い、六〇〇〇万にも上る人々が、ファシストらの頭 化」をうけ で考えられるかぎりのあらゆる人間性の堕落化、 ○○万の人々が殺され、その二倍ほどの人たちが 同 ŀ ことに、第二次大戦では、 領域が占領され、 玉 [の軍隊によって八八○○万の人が住 ただけではなかった。 十五の大都市と一七一〇の ソヴェト連邦で「約 ナチス ٠ ٢ イツとそ むソヴ 小都 野獣 五

> れ た。 電機がドイツに持ち去られたという。 気ボイラーと一四○○のタービン、一 三千の油 万の発電所が破壊された。また一一三五個所の炭砿と 万六〇〇〇マイルの主要道路、 111 れに郵便、電信、 キロメートルに及ぶ鉄道線路、 さらに、三万一八五〇の工業企業、六万 六○○万に上る建物が焼かれ、 七万の村落が完全に、 田が潰滅された。そのうえ一 電話各局を合せ三万六〇〇〇戸、五 あるいは部分的 九万にも上る橋梁と一 四一〇〇の鉄道駅、 または 万一三〇〇の発 万四〇〇〇の蒸 破 に 五〇〇〇 壊 破 B 壊 3 オレ

無論 は 77. 化と「三○○%の安全保障」感、そしてこれにともな 害とは、三つの重大な結果をもたらした。その一つは る国土の荒廃化、第二次大戦における予想を絶する被 を中心とする東ヨ ソヴェト体制とすればむしろ好まなかった赤軍の巨大 ってドイツからの侵略路をふせぐために、ポ 理解しえないし、 たないかぎり、 第一次大戦につづく反革命内戦と外国の介入戦によ ドイツに対する警戒心は動かしえないものとな 世紀間に三度ドイツの侵略をうけた」 立場に ソヴェト連邦のドイツに対する政策 ーロッペの安全保障圏化であっ N A T O (北大西洋条約機構) 1 ランド

は、著者の指摘をまつまでもなかろう。アメリカに対するソヴェトの疑惑は極度に強い。これをしきりに願う西ドイツの対米依存を深めようとする多角的核戦力の結成によって、核兵器へのアプローチ

6

要望したのである。戦時中における米ソ関係は、F・ 対して極東における第二戦線 あった。しかもそれでいて、アメリカは、ソヴエトに 実が、ソヴェトにあたえた西側に対する強い警戒心で をヨーロッパに結成してドイツを直接に、積極的にた トと他の西側諸国の関係にくらべるとはるかによか たこうとしなかった事実もあった。そしてこれらの事 攻撃を主としてうけていた間に、イギリスは第二戦線 側、とりわけイギリス、フランスの政策がある。さら に第二次大戦がすでに進行し、ソヴェトがドイツの猛 ナチス・ドイツの鋒先をソヴェトに向けて いっ た 西 とソヴェト領の一時占領から、第一次大戦発生までに 著者が特に強調している問題に、反革命軍への援助 しかしそれでも、 ズヴェルト大統領の慎重な政策によって、 極東における第二戦線の要求が 対日参戦をしきりに ソヴェ

となることは、きわめて自然であった。
実感であり、戦争への憎しみが「戦争屋」への憎悪感み、ドイツなど「戦争屋に対する憎しみ」は国民的なみ、ドイツなど「戦争屋に対する憎しみ」は国民的なるとの兵器によって、東部戦線で勝利をえただけでなるの兵器によって、東部戦線で勝利をえただけでなったがある。

では、 一方西側の指導層、とりわけアメリカの指導層は、 一方西側の指導層、とりわけアメリカの指導層は、 一方西側の指導層、とりわけアメリカの指導層は、 一方西側の指導層、とりわけアメリカの指導層は、 一方西側の指導層、とりわけアメリカの指導層は、

が、それにしても、第二次大戦中は、ドイツ、イタ

_

大原因は何か。 対立へと変り、しかも急激に悪化の一路をたどった最が、第二次大戦が終るとともに、対ソ関係が協力から脳は積極的にソヴェトとの関係を改善 し て いった。脳は積極的にソヴェトとの関係を改善 し て いった。リアという共同の敵を打倒し、さらに対日参戦を求め

を一九四五年八月の広島原爆に求めるのである。 すでにふれたように、フレミングは、この根本原困

7

すすめていったのである。

ない、しかも何の侵略の脅威を現実にうけていなかった。とはすべてしりぞけられた。そして、その「時をかせい」がでなくなる日が決して遠くないという科学者の忠然密でなくなる日が決して遠くないという科学者の忠をはずべてしりぞけられた。そして、その「秘密」がの連合国に教えることをためらった。その「秘密」がの連合国に教えることをがいる場所ではなかった。その秘密を共同の敵と戦い、最も多くの血を流した最大の秘密を共同の敵と戦い、最も多くの血を流した最大の秘密を共同の敵と戦い、最も多くの血を流した最大の秘密を共同の敵と戦い、最も多くの血を流した最大の秘密を共同の敵と戦い、最も多くの血を流した最大の秘密を共同の敵と戦い、最も多くの血を流した最大の秘密を共同の敵と戦い、最も多くの血を流した最大の秘密を共同の敵と戦い、最も多くの血を流した。そ

一方、ソヴエトはナチス・ドイツとの苦るしい戦い一方、ソヴエトはナチス・ドイツとの苦るしい戦いった。 そして協力が対立と変った以上、ソヴェトとしててアメリカは、国内のポーランド系国民の圧力もあって、ポーランドを中心とするソヴェトの東ヨーロッパ・で左派を弾圧し、右派を温存してきたイギリスのギリシヤ政策、そしてこれを踏襲したアメリカの核兵器によって重要性の大部分を失って、ポーランドを中心とするソヴェトの東ヨーロッパ・マーカンドを中心とするソヴェトの東ヨーロッパ・ロー方、ソヴエトはナチス・ドイツとの苦るしい戦いしては、無論、米英は一言もふれなかったのである。

状態にあった。
状態にあった。
なんの不思議ともしていない不思議な心理を問題にしてきた西側、とりわけアメリカが、第二次を問題にしてきた西側、とりわけアメリカが、第二次を問題にしてきた西側、とりわけアメリカが、第二次を問題にしてきた西側、とりわけアメリカが、第二次次戦を通じて、ソヴェト体制は果して何ヵ月もつか次大戦を通じて、ソヴェト体制は果して何ヵ月もつか大能にあった。

思惟態度をとらせている、と著者はみているようだ。 カの要塞」にとじこもるという「空中ブランコ」的なめに中南米に積極的に働きかけ、他方、原子爆弾の成めに中南米に積極的に働きかけ、他方、原子爆弾の成おいて国内の政争からこれに参加せず、第二次大戦終おいて国内の政争からこれに参加せず、第二次大戦終こここにも、反論理的な、非現実的な考え方がある。

8

以上が、ほゞ第二部までの論旨である。著者は、す

評

その原因をレジュメする。けアメリカが冷い戦いに敗れたという基本認識から、でにふれたように、第四部にいたって、西側、とりわ

第二部までは、あくまで米ソ関係が中心となっている。しかし第三部では、戦後アジアの特殊情勢、ことに反植民地主義・反帝国主義的ナショシナリズムという複雑な要素がはいることもすでにふれた。そのうえにして、アメリカが東アジアの外辺を支配しつづけるのを不可能にするであろう」と予言している。一方、著者は、アジアでは、「中国の核開発能力はやがて数年にして、アメリカが東アジアの外辺を支配しつづけるのを不可能にするであろう」と予言している。一方、著者は、アメリカとしては「ソヴェト連邦や中国のような巨大な、しかもダイナミックな国民の要望は、アメリカのいだく懸念と同じように、緊急の措置を要するものだ」とも説いている。

の将来はまったく暗いという点では、私は、著者の見む場から「新しい考え方や新しい態度、新しい政策」立場から「新しい考え方や新しい態度、新しい政策」立場から「新しい考え方や新しい態度、新しい政策」立場から「新しい考え方や新しい態度、新しい政策」がでもない。しかし全般的に、いまの時代に一政権のの将来はまったく暗いという点では、私は、著者とちがった見解をもっていな部分的には、私は著者とちがった見解をもっていない。

評

機関の隠然たる勢力に対して、つねにきびしい批判を とりよがりの政権や、これと結びつく保守的世論操作 方と完全に一致したいる。また、膨大な権限をもつひ 忘れない著者の勇気も、尊いものだと考えている。

9

第四部についても紹介をつづけてみたいと思う。 た。しかも、それは第一部、第二部の要点だけで終っ ている。もし、貴重な紙面がゆるされれば、第三部 批評はもとより、紹介も、はなほだ系統的でなかっ